

青森県立青森高等学校弓道部の歴史とその活躍

◆旧制青森中学校の弓道部時代

大正末期から昭和初期にかけ、青森には阿波研造範士の教える本田流大射道派昌道館と大平善蔵範士の射学院派鞆音会、八戸には玄道会と直心射道会、三戸に根屋鹿児師範の日本弓道会などの弓道場があった。

学校体育の中に弓道が取り入れられるようになったのは、昭和になってからである。

男女旧制中学校の正課として弓道が採用されたのは、昭和 9 年である。

県内の旧制中学校ではじめて弓道部を結成したのは、旧制青森中学(現在の青森高校)で昭和 2 年のことである。

青森市昌道館の佐藤信敬・沼田末吉等が指導にあたった。

佐藤信敬教士 7 段は明治 10 年生まれ、仙台医学専門学校卒、青森市浦町に外科医院を開業、医師会の幹部であった。

青森市に昌道館を開いて熱心に門下を教導した。

温容で信望のある人格者であったという。

沼田末吉範士 10 段は昭和 21 年 3 月初代青森県弓道連盟会長となった。

明治 23 年生まれ、大正 3 年明治大学法科予科を終了、大正 8 年佐藤昌道氏佐藤信敬氏に師事、同時に阿波研造範士の指導を受ける。

この頃青森中学校に続いて青森師範学校・八戸中学校・弘前中学校・三本木農学校・青森商業学校・青森高等女学校・協成中学校・三本木実科女学校なども弓道部を設置し、対抗試合も盛んになった。

当時旧制中学校の最高の試合は旧制弘前高等学校(現在の弘前大学で師範は佐藤信敬教士)主催の「北日本中学弓道大会」であった。

昭和 4 年同大会で優勝した青森中学チームは、佐々木龍藏(後の青森県弓道連盟会長)・佐藤章一・須藤陸奥雄(元十和田市助役)小野正文(元県立図書館長)の 4 選手であった。

また昭和 10 年の大会では青森商業が昭和 14 年には青森中学が優勝している。

この北日本中学大会を主催した旧制弘前高校は、大正 10 年開校と同時に弓道部を設置、佐藤信敬教士らが指導して実力をつけ、昭和 3 年、昭和 7 年の全国高校専門学校弓道大会(東北帝大主催)で優勝している。

昭和年代になると、県内では明治神宮大会への弓道の参加が一つの大きな目標となった。

昭和 12 年の第 9 回大会には熊谷省三（野辺地中学）桜田甚英・高屋敬一・渡辺久輔・渋谷門之介（青森中学）青山正雄（五所川原中学）的場清（三本木中学）が代表として参加している。

昭和 14 年には桜田甚英・佐藤信敬の外、滝谷重勝・高坂敬一（青森中学）古川正英（八戸中学）・中野渡建（三本木中学）らが代表となっている。

昭和 15 年の紀元二千六百年記念大会には及川喜与志（野辺地中学）浜田義雄・竹浪栄造（青森商業）児玉一夫・木村八郎（青森中学）らも参加。

そして昭和 16 年の 12 回大会には、後に日本一となる鈴木三成選手（八戸中学）がいた。

鈴木三成氏は後に全日本弓道連盟会長・国際弓道連盟会長を勤めた人である。

全日本弓道選手権大会に昭和 35 年～ 14 回出場し、優勝 2 回・2 位 3 回・3 位 1 回・5 位 2 回・最高得点賞 5 回、全日本弓道京都大会で射道優秀賞 5 回、東北・北海道対抗弓道大会個人優勝 6 回、国体出場 6 回、昭和 39 年東京オリンピック・デモンストレーション弓道競技代表。などなどいまだに現役の 10 段範士である。

◆青森高等学校弓道部の創部と新弓道場の寄贈

戦後の武道禁止令も、弓道に対しては風当たりがやや弱かった。

西洋にアーチェリーという競技があるんだから日本弓道も～というのがその理由だったとか。

昭和 24 年日本弓道連盟が再スタート、同年の東京国体から弓道が正式種目となり、昭和 26 年 7 月には学校体育の場に弓道が取り入れられた。

いわば弓道が戦前の伝統を受け継ぎながら、競技としての弓道へ完全移行し始めた時期である。

本県では沼田末吉（範士 10 段）、梅原徳治（範士 10 段）、佐々木龍藏（範士 9 段県連会長）、松原興一（県連副会長）、佐々木利義（東京オリンピック・デモンストレーション弓道競技代表）等戦前から活躍した人たちが、県弓道連盟の復活、競技の普及と技術向上に力を尽くした。

佐々木龍藏・佐々木利義氏は兄弟で、学生時代は共に旧制青森中学で活躍した。

戦後は青森県弓道連盟の会長・理事長として新制高校の弓道復活に力を入れた。

昭和 28 年 10 月青森県内の高等学校として、はじめて青森高校に本格的な弓道場ができた。

この道場は旧制青森中学校弓道部 OB「青弦会」が資金を出し合い、青森高校へ寄付したものである。

実際は青森中学 OB の佐々木龍藏氏が多額の資金（当時のお金で 280 万円、今だと 2800 万ぐらいになろう）を拠出している。

青森高校の弓道部を語るときこの人を於て語ることは出来ない。

佐々木龍藏範士 9 段は大正 4 年 1 月 7 日青森市本町に生まれ、旧制青森中学校から北海道帝国大学医学部に入学、昭和 16 年 3 月卒業している。

この北大在学中弓道部に入会し、仙台の阿波研造範士の審査を受けている。

昭和 17 年から 21 年まで陸軍軍医大尉として応召、復員後青森市浪打病院に勤務し、昭和 23 年青森市本町に外科医院を開業した。

昭和 24 年～ 52 年まで母校である青森高校の学校医として、29 年の長きにわたり生徒の保健管理・衛生指導に従事した。

昭和 22 年 4 月青森県弓道連盟理事長、昭和 39 年青森県弓道連盟副会長、昭和 50 年 4 月青森県弓道連盟会長として県内各地の弓道場の施設設備の整備を図った。

佐々木範士は自費で中央の斯道の範士先達を青森に招いて講習会を開き、全国的視野にたつて本県弓道界の水準向上に努めた。

自制心の乏しい青少年が増加しつつあることを憂慮し、物質生活の豊かな社会にこそ、たくましい身体と精神を同時に養う武道教育が重要であることを説き、とくに高等学校弓道の普及向上に情熱を傾けた。

昭和 41 年の青森県で開催された全国高等学校総合体育大会・昭和 52 年の第 32 回国民体育大会弓道競技に際しては、八戸高校の弓道場を充実改装し、大会の企画・立案・運営に携わりこれを大成功させた。

弘前大学の弓道部師範でもあった。

佐々木範士の書いた「射法大意」は今でも県内弓道愛好家の教本として、いろいろな研修会で活用されている。

佐々木龍藏氏は慈善家でもあり、自分の母校北海道大学にも弓道場を寄付している。

また東京都小平市の青森県学生寮の建設や松風塾高校の建設の際も多額の資金を寄付した。

青森県下で新制高等学校とし最初に新設された青森高校の弓道場は、校舎と体育館の間に建設され、立派な木造の 5 人立ち道場の建物と銅板屋根葺き白壁の安土からなっていた。

この当時の弓道部顧問は齋藤敬三錬士 6 段の数学の先生であった。

2 歳年上の齋藤正彦氏とともに旧制青森中学の弓道部から共に旧制弘前高等学校弓道部・そして京都大学弓道部で活躍した。

齋藤正彦氏は京都大学工学部卒業後東京電力に就職し、実業団弓道大会でも大いに活躍した。

定年後は故郷の青森高校の弓道部や弘前大学の弓道部無門会のことを心配され、帰郷の際は必ず母校を訪れ指導された。

昭和 28 年 10 月新設された青森高校弓道場道場修祓式には、当時近世の弓聖と言われた阿波研造範士門下の三大高弟神永政吉範士 10 段・安沢平次郎範士 10 段・吉田能安範士 10 段が祝射としての射礼を行っている。

矢渡しは全日本弓道連盟会長を務めた千葉胤次範士であった。

このような豪華な範士たちの射礼などは今ではもちろんのこと、当時としても高校の道場開きとしては異例中の異例であった。

◆青森高校弓道場にあった「真善美」の額とその揮毫の意味

翌年の昭和 29 年初秋、三人の範士が新築の青森高校弓道場のために揮毫してくれた立派な額が道場に寄贈され掲げられていた。

この額は生徒が弓で疵をつけたため、青森市弓道連盟で修復して保管している。

その額には「真 善 美」と書かれている。

その揮毫の「真」の文字には神永政吉範士の的宗射人の号が、「善」の文字には安沢平次郎範士の東宏道人の号、「美」の文字には吉田能安範士の紫鵬の号がそれぞれ銘記されている。

それぞれの文字は力強く迫力があり実に見事なものであり、今は弓の世界では国宝級の垂涎の宝物である。

揮毫者の一人吉田能安範士は昭和 16 年日光東照宮社前武道大会の固物射貫の演武射で昔の鉄兜を射貫いた人である。

青森高校弓道場に掲額されていた「真・善・美」について全日本弓道連盟はホームページの中で「弓道の心」として次のように述べている。

『弓道は高い指標「真・善・美」を掲げている。

「真」の弓は偽らない。

弓道には正射必中という言葉がある。
これは正しい射法で射られた矢は必ず中^あたるという意味である。
そして私たちは、的^あに中てるために、正しい射法を目指して日々練習するのである。
弓を射るということは、正しい射法を目指す「真」の探求である。
そして的は私たちに、自分の今行った射が正しいものであるかを教えてくれるすばらしい先生なのである。
一射ごとに「真」を求める姿勢、それが弓道である。
「善」は平常心に宿る。
弓は争う、相手を憎むという考えとはまったく反対の世界である。
弓の世界に敵はいない。
いるとしたら、揺らぎ、動揺する自分の心が敵なのである。
自分と向かい合い、心を養い、常に平常心でいられる心を作ることこそが弓道の本来の目的なのである。
また弓道場ではお互いに親しみ、礼節を重んじることを大切にしている。
このようなことを大切にすることで、私たちは今現代人に必要としているほんとうの教養を養うことができると考えている。
「礼節」を大切に、「相手を慈しむ」ことこそ、弓道の基本精神なのである。
「美」は「真」と「善」の結晶。
弓の世界では「美」は「真」の形と「善」の心が一体となった時に現れる』といわれている。

◆青森県高体連弓道部の結成とその活躍

昭和 29 年には青森県高体連弓道部が結成され、青森県高校総体に青森高校ははじめてオープン参加した。

この時は青森高校・八戸高校・弘前高校・三戸高校・東奥義塾高校の 5 校で競技を行っている。

初の高校総体弓道競技では三戸高校が優勝した。

昭和 30 年以降は青森高校と八戸高校が激しくしのぎを削り青森県高校弓道界をリードした。

青森高校は昭和 30 年秋季県下高校弓道大会男子団体優勝、昭和 31 年県下高校総体男子個人優勝、秋季県下高校弓道大会男子準優勝、32 年県下高校総体男子団体準優勝、昭和 33 年県下高校総体男子準優勝、女子団体準優勝、昭和 34 年県下高校総体男子団体準優勝、女子準優勝、昭和 35 年県下高校総体女子団体優勝・秋季県下高校弓道大会女子団体優勝、昭和 36 年高校総体は男子団体優勝・個人優勝、女子団体準優勝している。

昭和 37 年第 9 回県下高校総体女子団体優勝、昭和 39 年第 11 回県下高校総体は男子団体が優勝している。

一方青森高校のライバル八戸高校は梅原徳次範士（明治 11 年生まれ、東京歯科医学学校卒、歯科医開業、仙台の氏家東湖に師事、明治 35 年より本田利実範士、明治 39 年より小笠原清道範士、大正 6 年より窪田藤信範士、大正 10 年より阿波研造範士に師事し大射道教を修業し、八戸市で開かれた国体を前に 100 歳で逝去した。範士 10 段）・松原興一氏（旧南部藩弓道師範の家柄を継ぐ、青森県弓道連盟副会長）の両氏のほか、弓道日本一、天皇杯獲得の鈴木三成（八戸中学 OB）らの指導で大躍進を見せる。

昭和 32 年～33 年の全国高校弓道選手権大会で決勝トーナメントに進出し、技能優秀校に選ばれた。

個人でも和田武久選手が 2 位に食い込み、上野真三選手が技能優秀に選ばれ、33 年には小島誠一選手、34 年には細越秀樹選手も技能優秀選手に選ばれるなど全国トップクラスで活躍した。

そして昭和 33 年の第 13 回富山国体で小島誠一・中村一・上平豊の八高弓道部は高校の部で初の国体優勝をはたしたのである。

実はこの時の県代表を決める国体予選では青森高校が 1 位となり、八戸高校は 1 中差で 2 位だった。

県代表の選考会でも当然青森高校が国体の青森県代表に選ばれるものと思われたが、青森中学 OB の佐々木龍藏・利義の両氏が八戸高校を県代表に推した。

八戸の選考委員もびっくりしたが、異論がなくスナリ八戸高校が代表となった。

今では考えられない選考であったが、結果は正解であった。

後に佐々木龍藏氏は「過去の成績や射形、技術などから公平な目で八高を選んだ。母校の青森高校の選手からは恨まれたが私たちは正しかったと思っている」と語っていた。

果たしてこの時青森高校が代表となっていれば国体優勝ができたかどうか

…。この時の青森高校の選手は芳賀敏彦・坂巻信明・工藤俊雄の3人であった。

平成になって仮設の狭い不自由な弓道場で練習を余儀なくされても、平成11年第46回県下高校総体で男子個人準優勝をしている。

平成14年県下高校弓道遠的大会女子団体準優勝、平成17年春季県下高校弓道大会女子団体準優勝、第52回県下高校総体男子個人準優勝、第9回県下高校弓道遠的大会男子団体準優勝と好成績をあげている。

平成24年第16回県下高校遠的大会男子団体準優勝、女子団体優勝。

平成26年第26回春季県下高校弓道大会男子団体準優勝、第61回県下高校総体男子団体準優勝、男子個人優勝。

平成27年県下高校総体男子団体準優勝、男子個人優勝、第19回県下高校弓道遠的大会女子団体優勝。

平成29年第29回春季県下高校弓道大会男子団体優勝、第21回県下高校弓道遠的大会男子団体が準優勝をしている。

現在の劣悪な環境のなかでも青森高校がよく頑張っていて、伝統校の強みを発揮し続けていることはほんとうに頼もしいかぎりである。

◆坂本達雄氏全日本弓道選手権大会で最高得点賞に輝く

第31回青森高校弓道部卒業の坂本達雄氏教士7段（青森市弓道連盟・青森警察署勤務）が三重県伊勢市神宮弓道場で平成23年9月開かれた全日本弓道選手権大会で3位・平成25年9月の同大会には4位に輝いている。

この3位のとときの東奥日報"キラリ輝く"の記事の中で坂本達雄氏は「弓道は人生の縮図。その人の生き方が射格に出る。人生をかけるに足る武道です」と語っている。

坂本達雄氏は平成29年9月伊勢市神宮弓道場で行われた第68回全日本弓道選手権大会で、天皇杯と同格と言われる男子「最高得点賞」に輝いた。

坂本達雄氏は今日本で天皇杯に最も近い人と言われている。

参考 昭和46年12月11日 東奥日報 スポーツ・イン AOMORI 65

昭和52年5月30日 東奥日報 あおもりスポーツ群像 139・140

平成30年8月28日

文責 青森高校弓道部 昭和35年10回卒

青森市弓道連盟 錬士5段 小笠原誓輝

